

敬虔主義とゲーテ

芝田豊彦

1.

2001年8月28日から9月1日にかけて、ハレ・ヴィテンベルク大学〈敬虔主義研究のための学際的センター〉とフランケ・シュティフトゥンゲン (Franckesche Stiftungen)¹ および敬虔主義研究歴史的委員会との共催で、記念すべき敬虔主義研究第1回国際会議がハレのフランケ・シュティフトゥンゲンで開催された。敬虔主義 (Pietismus) と言うと、かつてはドイツ・ルター派内の信仰革新運動というイメージがあったが²、現在では改革派、更にはドイツ国外での同種の運動も含み、敬虔主義研究も国際的な広がり呈するようになってきた³。また所謂〈ラディカルな敬虔主義〉も正当な評価を受けるようになった⁴。これらのことを上記国際会議に参加して身をもって実感した次第である。このような質および量における敬虔主義研究の進展が、国際会議を開催させる原動力となったのであろう。

さてその2年前の1999年は、ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832) 生誕250周年にあたる。フランケ・シュティフトゥンゲンでも、1999年3月25日から27日にかけて展示会「分離主義者、敬虔主

1 伊藤利男氏は、「フランケ学園」と訳しておられる。(伊藤利男『孤児たちの父フランケ』、鳥影社、2000年)

2 例えば、『キリスト教大事典』(教文館、初版1963年、改訂新版第9刷1988年)では、「敬虔主義」とは「ルター派の正統主義に対する改革運動」(371ページ)であるという記載がある。

3 Vgl. Strom, Jonathan: Problems and Promises of Pietism Research. In: Church History, Studies in Christianity and Culture. The American Society of Church History. Vol.71 2002 No.3, S.544.

4 Vgl. Strom 2002, S. 543.

義者、ヘルンフート派。ゲーテと〈国内の静かな人々〉⁵」(Separatisten, Pietisten, Herrnhuter. Goethe und die Stillen im Lande) が催された。そして展示会に随伴してシンポジウムも同時開催された。このシンポジウムに基づく寄稿論文を集めたのが、ケンパー (Hans-Georg Kemper) とシュナイダー (Hans Schneider) の編集による『ゲーテと敬虔主義』⁶で、2001年に出版されている。

この論文集は、「これまでほとんど注目されず過小評価されてきた著者〔ゲーテ〕と彼の時代の諸関連を新たに発見し、「まさにそのことによって彼の作品が新たに読み得るようになり得る」(GP VII) 機縁を我々に与えてくれるものと思われる。何故なら、敬虔主義はまさにそのような諸関連の一つであるからである。

もとよりゲーテは敬虔主義者ではない。しかしゲーテが「敬虔主義的な敬虔 (die pietistische Frömmigkeit) との出会いによって多様に靈感を与えられた」(GP VII) ことは否定することのできない事実である。この事実は、従来あまりに過小評価されていたように思われる。一般に日本のゲーテ研究者・愛好者は、キリスト教が嫌いなようである。例えば、彼の作品 „Die Leiden des jungen Werthers“ は福音書を連想させる箇所が多々あり、ヴェルターの (die) Leiden をイエスの受難・受苦 (Passion, das Leiden) に直接結びつけることはできないにしても、両者は無関係ではない。いやむしろ密接な関係にある、とさえ私自身は思っている。にもかかわらず我が国では、同書は伝統的に『若きヴェルターの悩み』と訳されている。勿論この作品でも既存のキリスト教会に対する批判は厳しく、この作品をキリスト教的と呼ぶことは全くの的外れである。しかし、Leiden が感傷的な「悩み」という邦語で訳されることによって、この作品が感傷的で弱々しい性格のものと思なされ、更にイエスの受難を連想する可能性まで絶たれるのはまことに残念である。

5 所謂静寂主義 (Quietismus) を実践した敬虔主義者のこと。この表現は、詩篇35章20節による。

6 Hans-Georg Kemper u. Hans Schneider (Hrsg.): Goethe und der Pietismus. Tübingen: Verlag der Franckeschen Stiftungen Halle im Max Niemeyer Verlag, 2001. [Abk. GP]

上で既存のキリスト教会批判と言ったが、敬虔主義の出発点も、性格こそ違え、そのようなキリスト教会批判である。そしてゲーテが出会った敬虔主義は、よりラディカルな敬虔主義なのである。ゲーテ生誕250周年を記念して行なわれた展示会の名称は、実はゲーテの『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit) 第1章の或る箇所に基づく。その箇所の前では、「教会的プロテスタンティズム」は無味乾燥な一種の道徳であり、その教義は我々の魂にも心にも訴えるところがないと言われ、更に次のように続く。「そのため、律法的教会 (die gesetzliche Kirche) からじつにさまざまな分離が起こった。分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派、<国内の静かな人々>が生じた、彼らはその他さまざまな名称で呼ばれているが。しかし彼らは、とくにキリストを通じて、公認の宗教の形態では可能とも思えないほどに神に近づこうとする意図をもっていた点では、いずれも同じであった。」(HA 9, 43)⁷ここではゲーテ自身の既存キリスト教会に対する批判と、敬虔主義に対する高い評価を窺うことができる。ただ、「分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派」等の名称が特に定義が与えられることなく並列されていることに注意しなければならない。実は敬虔主義には、教会内敬虔主義 (der innerkirchliche Pietismus) とも言うべきシュベナー的な意味の穏健な敬虔主義があり、それが謂わば本来の敬虔主義であった。しかしゲーテは律法的教会と敬虔主義的運動の対照を際立たせるために、意図的に教会内敬虔主義という形態を無視したのである (Vgl. GP 262)。またフレーゼニウス (Johann Philipp Fresenius) もハレ派の意味での敬虔主義者であるが、ゲーテは彼が「ヘルンフト派には反対の態度をとっていたので、これらの分離した敬虔な者たち (die abgesonderten Frommen) にはあまり評判がよくなかった」(HA 9, 143) と書き、彼を敬虔主義者の名では呼んでいない。このようにゲーテに影響を与えたのは、穏健というよりむしろラディカルな敬虔主義であることが分かる。もっともヘルンフト派はラディカルな敬虔主義に含めないのが普通であるが、ラディカルな

7 訳は潮出版社版『ゲーテ全集』を用いたが、部分的に訳を変えているので、最終的な文責は本稿執筆者にある。また『詩と真実』の引用箇所は、ハングルク版全集 [Abk. HA] による。

性格を帯びた宗教団体であることは否定できない。

<キリスト教>、或は<敬虔主義>は決して一枚岩ではなく、内に多様な要素を含んでいるのである。したがって我々は<キリスト教>、或は<敬虔主義>という言葉で勝手なイメージを作りあげてしまい、そのような偏見的イメージから、例えば「ゲーテと敬虔主義」というテーマを裁断してしまうようなことを心から慎まなくてはならない。特にキリスト教の伝統のない我が国では、そのような危険は大きいと思われる。『詩と真実』に関しては、上述の論文集の論文の一つであるギュンター・ニグル (Günter Niggel) の論文『『詩と真実』におけるゲーテの敬虔主義像』が、<ゲーテと敬虔主義との関係>を考察するうえで大いに参考になるであろう。

2.

先ほどの『詩と真実』第1章の引用に続いて、ゲーテは、「〔敬虔主義者は、〕その独自性 (Originalität)、心情性 (Herzlichkeit)、堅忍 (Beharren)、自立性 (Selbstständigkeit) などによってひとの心をひきつけた」(HA 9, 43) と書いている。ニグルはこれらの徳目でゲーテは次のような意味を込めているのではないか、と主張している。即ち、「独自性」によって「敬虔主義者たちが聖書の源泉および原始キリスト教へ回帰したこと」を、更にひょっとして「再び刷新された<再生という理念>」もゲーテはほのめかしているかもしれない、「心情性」によってゲーテは恐らく「内なる人の<建徳>と感情に満ちた<敬虔>」を意味し、「堅忍と自立性」によって「公的教会の外部で<直接に神の子である>という彼らの新しい立場」を完全に承認している、と。

しかしニグルによれば、これらの徳目の意味は以上で尽きるのではない。「独自性、心情性および自立性で同時に後の天才美学の主要点が挙げられている。それ故に、『詩と真実』における敬虔主義の最初の素描において既に、ほとんど気付かれずに将来の新しい文学の開拓者としての敬虔主義の重要な精神的役割が暗示されるのである。」(GP 259) 敬虔主義がゲーテにおいて持つ重要な意味を示唆する発言である。

このような敬虔主義の叙述を受けて、幼いゲーテは「直接神に近づこう」(HP 9, 43) と香燭を用いて独自の旧約聖書の犠牲を捧げるのであ

る。しかし結果は、蠟燭が燃え尽きて、赤い漆と美しい金の花を焦がしてしまうのである。第1章の最後でゲーテは次のように言っている。「この偶然の出来事は、このような方法で神に近づこうとすることが、一般にいかほど危険であるかということの暗示であり警告であると考えてもさしつかえないであろう。」(HA 9, 45) 敬虔主義に刺激されて、このような「独自の、自立した、心からの礼拝の形式」(GP 260)で礼拝を行なったことは確かであるが、幼いゲーテの行なった礼拝は、敬虔主義的というよりも、自然宗教的、せいぜい旧約聖書的なものであることも明らかである。それ故に、ゲーテの言う「このような方法」が「敬虔主義的な自立性」を含んでいるのか、或はむしろ、「すべての共同体の外で敢行された一人だけの〈神への直接性〉」(GP 260)という幼いゲーテの行なった礼拝しか意味していないのかは不明である。後者の場合には、「敬虔主義者の態度は、〈無味乾燥な教会性〉と、〈怪しげで、我意的・宗教的な押し付けがましさ〉という両極端の間の生ける穏健な中道」(GP 260)ということになるであろう。

『詩と真実』第8章に移ろう。ライプツィヒでの略血の後に(1768年8月)愛情をもって世話し励ましてくれた友人たちの内で最も重要なランガー(Ernst Theodor Langer)も、ゲーテの敬虔主義像を考える上で重要である。ゲーテは、キリスト教が「それ自身の〈歴史的で実定的なもの〉」、即ち特にイエス・キリストの啓示と、「純粹な理神論」との間で動揺していると主張する(HA 9, 334)。この二つによって信仰者も二つのタイプに分類されるが、ランガーは啓示宗教を信奉するタイプに分類される。ゲーテによると、ランガーは他のすべての伝承にまさって聖書を尊重すると同時に、神との関係において「仲介」が必要であると考えていた(HA 9, 334f.)。しかし、ランガー自身が敬虔主義的考えの持ち主であったかどうかは明言されていない。この点は重要である。ニグルは、「当時ゲーテが敬虔主義的な思想世界と信仰世界にどの程度接近したか」は、『詩と真実』では三重の仕方で覆い隠されている、としている。「第一に回心(Bekehrung)が聖なる書としての聖書に対する畏敬の刷新に制限されているが、更にそのことが〔ゲーテ自身の〕以前の見解への単なる回帰として解釈される。第二に、福音に対するこの新たな関心が病人の感じやすい状態でもって説明される。第三に、ランガーが

どれだけ敬虔主義的な信仰潮流の代表者であり得たかは、周到に秘匿されている。」(GP 262) ゲーテの敬虔主義に対する微妙で複雑な関係を読み取ることができるであろう。

ゲーテはその後フランクフルトに戻って、1778年から1779年にかけて病氣療養の時期を送る。この時期に母の友人であるクレッテンベルク嬢(Susanna Katharina von Klettenberg)に出会う。『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』における「或る美しき魂の告白」は、彼女の談話や手紙から生まれたものである(HA 9, 338f.)。周知のように、クレッテンベルク嬢はヘルンフト派に近い立場の人として描かれている。彼女についてはゲーテ研究でよく知られているので、ここでは『詩と真実』における彼女についての記述に関連して一つだけ指摘しておきたい。彼女は両極端の中間の道を歩んだ人としてゲーテによって評価されているが、両極端の一つの極端を代表してグリースバハ夫人(Frau Griesbach)の名が挙げられている(HA 9, 339)。ニグルによれば、彼女は「厳格で、冷静で、学識のある、それ故に『大いなる装備』を持ち合わせている<敬虔主義の一変種>」(GP 263)を代表している。「大いなる装備」ということで、ゲーテは「ハレの回心体系」(GP 263)をほのめかしているというのである。ここでもハレの穏健な敬虔主義は低い評価しか受けていないし、ゲーテ自身はグリースバハ夫人に対して敬虔主義という言葉を用いていない。

3.

『詩と真実』第8章では、更にアルノルト(Gottfried Arnold)が言及される。彼はラディカルな敬虔主義者の中で最も重要な人物の一人であり、彼についてはラディカルな敬虔主義者の中で最も研究が進んでいる⁸。ゲーテはアルノルトの『教会と異端の歴史』によって、「これまで狂気あるいは背神として説明されていた多くの異端者について、より有利な概念を私に与えてくれた」(HA 9, 350)と言い、アルノルト自身に

8 日本での研究はほとんどないが、彼のソフィア神秘主義に関しては、次の論文がある。「ゴットフリート・アルノルトとソフィア神秘主義」(『関西大学東西学術研究所紀要』第36輯所収)

についても、「この人はたんに省察をこととする歴史家ではなくて、同時に敬虔な、情感の深い人物であった」(HA 9, 350)と非常に高い評価を与えている。ゲーテにおいて、ラディカル、或は分離主義的な敬虔主義の評価が高い理由の一つは、彼らが「自分自身の宗教」(HA 9, 350)を持っており、また彼らからそのこと、即ち自分自身の宗教を持つことを学んだ点にある、と言ってよいであろう。

論文集『ゲーテと敬虔主義』の中では、編者の一人であるシュナイダーがゲーテとアルノルトの『教会と異端の歴史』との出会いについての論文を書いている。

ここでもう一冊取り上げたいのは、このシュナイダーの60歳誕生日記念誌である論文集『受容と改革』⁹である。この論文集では、シュラーダー (Hans-Jürgen Schrader) とヴァルマン (Johannes Wallmann) がゲーテに関連した論文を寄稿している。特に後者の論文は、「分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派? ゲーテと<フランクフルト・アム・マインの教会的敬虔主義>」というテーマについて書かれており、本稿とも関連が深いので是非読んで頂きたい。(なお私事にわたって恐縮であるが、シュナイダーの記念誌で、彼の誕生日を祝う者の氏名一覧に筆者の名前も記載されている)

以上舌足らずな紹介になってしまったが¹⁰、日本では敬虔主義的な視

9 Wolfgang Breul-Kunkel u. Lothar Vogel (Hrsg.): Rezeption und Reform. Festschrift für Hans Schneider zu seinem 60. Geburtstag. Darmstadt u. Kassel: Verlag der Hessischen Kirchengeschichtlichen Vereinigung, 2001.

10 補完の意味もあり、ニグルの論文の最後の段落を訳出しておく。「総括的に我々は次のように書き留めることができる。『詩と真実』で次第に高まるテーマとモチーフの流れにおいて、ゲーテは様々な年齢の段階で起こる、自伝的なく私>と敬虔主義とのすべての重要な出会いを、それが特殊な潮流との出会いであれ、代表的な個々の人物との出会いであれ、まったく微妙な陰影を付してであるが、全般的にはポジティブに描いている。しかも、彼が敬虔主義的な出会いのそれぞれに時代の精神的生におけるアウトサイダーの役割を認め、それ故に宗教的、哲学的、および美学的観点において、成長する<私>への絶えざる生産的な影響を敬虔主義の出会いが持つことを認めることによって、である。かくして敬虔主義の意味は、人間としての彼にとっても同様に詩人としての彼にとっても際立たさ

点からのゲーテ研究があまりに少ないので、ゲーテの専門家でもない筆者が非力をも顧みずこの欄を利用して一文を草した次第である。伊藤利男氏も言われるように、「敬虔主義はわが国では、まだ未開拓というに等しい研究領域」¹¹である。拙文を契機に、一人でも敬虔主義に興味を持って下さる方があれば嬉しい。

れ、このことによってこの芸術家の生の描写における中心的な意味が敬虔主義に付与されるのである。」(GP 268)

なお、敬虔主義については『詩と真実』第15章の記述(HA 10, 41ff.)も重要である。(Vgl. PG 266-268.)

11 伊藤2000年、9 ページ。